

他に喜びを与える



多忙な毎日が続くくと、つい自分のことしか考えられないのが私たちです。しかし、そんなときこそ、周りの人に心を配り、周りの人のために自分のできることを探して、実行してみてはいかがでしょうか。そのような心づかいや行動は、自分の人生を豊かなものにしていきます。

整理されない資料棚



印刷会社の営業部に勤める田中雄介さん(30歳)は、今週末の営業会議で検討する販売促進に関する資料づくりに追われています。

「もうこんな時間か。今日は少し帰りが遅くなるかなあ……。えーつと、K社の販売実績は?……あれ、資料を持ってこなかったかな。確かあの資料は」

田中さんは、独り言をつぶやきながら、

オフィスの一角にある資料室に向かいました。

資料室の棚には、過去の営業実績に関する資料ファイルや関連書類、参考図書などが収められていました。本来ならば、項目ごとにファイル名やタイトルなどが五十音順に整理されていると探しやすいのですが、実際は雑然とした状態で、さらに資料が持ち出されたまま抜けていた

り、ファイルの天地が逆さまだったりして、とても整理されているとは言えません。

そんな中で田中さんはK社の販売実績のファイルを探し出そうとしますが、なかなか見つけることができませんでした。たまりかねた田中さんは、近くにいた後輩の鈴木さんに尋ねました。

「おい、鈴木くん。ここにあったK社のファイルを誰か使っていたかい？」

「え？……そこにはないですか？ おかしいな、この前まであったんですけれどね。」

またきつと誰かが持ち出したまま返していないんでしょう。ところで、何をお調べですか？ K社の販売資料なら、一週間前に私も調べたばかりで、控えのコピーもありますよ」

「そうか、それじゃあ、ここ半年の販売実績を教えてください。助かるよ」

「どうやら探している資料は、誰か別の人が持つていつているようです。」

「使った資料は元に戻すことになっているのに、まったくいつた誰が持つていったんだ！ 大事な共有資料なんだから、元の場所にちゃんと戻せよなあ！」

「どうも釈然としない表情の田中さんでしたが、鈴木さんの手助けもあって、何とか営業会議用の資料を用意することができたのでした。」

「がんばってね！」

さて、仕事を終えて帰宅した田中さん。
妻の恵子さんがいつものように迎えてく
れました。



「ただいま。週末の会議の準備が手間取つて、少し帰りが遅くなつてすまないね」

恵子さんは、「お帰りなさい」と答えながら、夕飯の準備に取りかかりました。幼稚園に通っている娘の由香ちゃん（6歳）は、子供部屋で既に寝ているようです。

田中さんが着替えて食卓に着くと、恵子さんは鼻歌を歌いながら食事の準備をしています。

「なんだい、やけに嬉しそうじゃないか。何かいいことでもあったのかい？」

「うふふ、分かる？ 訳は後で教えてあげるわね……」

しばらくして食卓に夕飯を準備し終えた恵子さんは、田中さんが食事を始めると堰を切ったように話し始めました。

「それがね、あなた。今日の幼稚園の保護



者面談しゃめんだんで、とつても嬉しいことがあったの。卒園前の面談で、担任たんじんの先生とこの一年のいろいろな思い出話になっちゃったんだけど、先生から突然、『由香ちゃんがこのクラスにいてくれてとても良かった』って言われてね……」

幼稚園の先生は、恵子さんにこんな話をしてくれました。

——秋の運動会に向けて、リレーの練習をしているときの事です。いつごろからか、由香ちゃんが次のランナーにバトンを渡すときに、「がんばってね」と声をかけているのを耳にするようになったんです。「いいことだなあ」とは思いましたが、私は何も言わずにいたんです。すると、いつの間にかそれが自然とクラス全体に広がっていった、みんなが次のランナー

にバトンを渡すときに「がんばってね」つて声をかけるようになったんですよ。

長年この年ごろの子供を見てきました
が、普通、運動会のクライマックスであるリレーの競争に負ければ、負けただけのムの中に泣きじゃくったり、誰々のせいで負けたと他の子を悪く言ったりする子供がいたりするのですが、このクラスには全然そういうことがありませんでした。練習のときから、「自分の番は精いっぱいがんばった。だから、次の人もがんばって走ってね」という気持ちでやっていたので、勝負に勝つても負けても充実感があつたんだと思います。

だから、由香ちゃんには本当に感謝しているんです。大事なことを教わったなつて思っています——。

「私、この話を先生から聞いたとき、嬉しくて思わず涙が出ちゃったの……」

「そんなことがあつたのか。でも、由香はどうしてそんなふう言い出したんだろうね」

「私もそれを不思議に思つて、幼稚園からの帰りの車の中で聞いてみたの。そうしたら『だつて、みんなががんばってほしかったんだもん』ですつて」

「そうか。みんなのことをそんなふうに見えるなんて、由香は優しい子だな。かなり親ばかが入っているけどね、ハハ」

田中さんは、そう言いながらも幼い娘を誇らしく思うのでした。



子供から教えられる

その夜、床に就いた田中さん。由香ちゃんのことを思うと、自然と顔がほころびます。

「由香は、本当にいい子だな。『みんながんばってほしかった……』って、あんなに小さいのに、みんなのことを考えられるんだもんな。それに、僕もリレーを何度もやった経験があるけれど、由香のように、次の人のことって考えたことがあつたかなあ。〃次の人のこと〃を思うか!？」

田中さんは心の中で、ふとこの言葉をつぶやきながら、資料室にある雑然としたファイルを思い浮かべていました。

「自分は、『次の人のこと』を考えていた



だろうか? 〃あゝあ、なんて整理が悪いんだ〃とか、〃使った資料はきちんと元の場所に戻せよな〃とか、自分だつて資



料を返すのを忘れたり、無造作むぞうさくに返して
いたりしているくせに、自分のことは棚
に上げていつも誰かを責めてばかり。少
しは由香を見習って、僕も次の人のこと
を考えて資料の整理でもしてみるかな」
翌朝よくちようから、田中さんは毎朝三十分早く
会社に出勤することになりました。それ
は、少しずつでも資料室の棚を整理して
みようと考えたからです。

まず、資料ファイルや関連書類など
を、項目ごとに整理して、アイウエオ順
に並べ替えることにしました。項目ごと
に整理するには、その内容を確認する必
要もあり、思いのほか手間がかかる作業
でした。初めは何か手をつけていいの
か分からず、なかなか大変でしたが、少
ずつコツコツと作業を進めました。

そして、三週間が過ぎました。後輩の鈴木さんたちも手伝ってくれるようになり、書類棚も今までとは見違えるように整理されてきたのです。

※

「今まで、過去の資料は自分の仕事をスムーズにこなしていくために必要な道具としか見ていませんでした。恥ずかしい話ですが、毎日の忙しさに追われて、この資料を次に使う人のことまで考えていませんでした。しかし、次に使う人のことを考えて整理していたら、資料の分類の仕方など改善点がいくつも見つかりました。

それに、未整理の資料に目を通しながら作業を進めていくうちに、この書類は、その作成にかかわった社員の労力が



つまっている大切な共有財産なんだと、あらためて気づくことができました。その大切な共有財産を、〃次に使う人のこと〃を思っって大切に扱う——その心が全員で共有できれば、資料を雑に扱うことも少なくなるだろうし、今自分が担当している仕事も、将来につながっていくのでは



ないかと思えます」

笑顔でそう語る田中さんですが、今回は、娘の由香ちゃんからいろいろなることを教わったようです。

さて、資料室の整理を終えた田中さんと後輩の鈴木さんたちは、後日、ある提案を上司にすることにしました。それは、「みんなの思いが詰まった仕事の記録です。次に使う人のことを考えて大切に扱います」というのは、紙を資料棚の目立つ場所に貼ることでした。

——このはり紙がどこまで効果があるかわからないけれど、少しでも仕事が気持ち良く、スムーズにはかどれば、きっとみんなが喜んでくれる——田中さんたちは、そんな思いでこれからも資料室の整理整頓を心がけていこうと考えています。

他に喜びを与える生き方

私たちは、「幸せ」という人生の大目標に向かつて、一人ひとりが一生懸命に生きています。「幸せ」とは、言い換えれば、人生の喜びであったり、充実感や生きがいととらえることができます。

ところが、私たちは、その「自分の幸せ」を追い求めるあまり、つい自分だけのことしか考えず、他への配慮を忘れてしまうことがあります。

このことに関して、会社を「全社員が嬉々として出社する人生道場」とすべく、人づくり第一の経営に取り組み松岡浩さん（医薬部外品製造企業・タニサケ会長／岐阜県掛妻郡）は、次のように述べ

ています。

——大人か子供かという区別は、年齢や肉体の成長度合いとは関係なく、心のレベルによる区別です。別の角度から言うと、「いい生活」をめざすのか、「いい人生」をめざすのかの違いです。

「いい生活」とは、ブランド品で着飾り、豪邸に住み、高級車に乗る、いかなれば





利己の世界、自分だけの欲の世界、つまり「子供の世界」です。

一方、「いい人生」とは、自分が犠牲を払って他人を喜ばせる生き方です。これは「大人の世界」です。

具体的に言うと、例えば何か会合が催されるという場合、必ず誰かが世話役として、会場の準備をするものです。そこで、自分もその会合に参加するのなら、定刻より先に行つてその世話役の方に「何かお手伝いすることはありませんか」と声をかける。イス並べでも資料の準備でも、何か一つでもいいからお役に立てるよう心がける。これが「大人」の生き方だと私は考えています。

反対に、自分は参加してやつているのだから、という思いが強く、世話役の段

取りや進行のアラなどを探して、責め立ててばかりの人というのは、まだまだ子供の世界にあるといえるのではないのでしょうか。

こうした日常における場面、場面での、ちよつとした心のあり方、言動の差が、積もり積もつて人生のよしあしを決定づけます。

とにかく、相手を喜ばせようという行動、これが「いい人生」をつくるコツです。ですから、今、自分のやつていることや、めざしていることが、はたして「いい生活」（子供の世界）なのか、「いい人生」（大人の世界）なのかを意識して動くようになるだけで、人生はきつと好転するはず——。（『喜びの生き方塾』モラロジー研究所刊より）



※

自分が「犠牲を払う」というと、なんだか損えんをしているように感じてしまうかもしれません。しかし、犠牲を払って周囲の人を喜ばせるよう何らかの努力をしていけば、周りの人が幸せになり、その幸せな人に囲かこまれている自分が幸せになるのです。古くから、「情けは人のためならず」「損とんして得取とくれ」といわれる所以ゆえんでしょう。

また、周囲の喜びのために努力している人を、心ある人々は放はなつておきません。必ず、応援おうえんしてくれる人が現れることでしょう。大切なのは、心のベクトルを自分自身の「よい生活」に向けることではなく、周りに喜びを与える「よい人生」に向けていくことなのです。

心の眼を周囲に向ける

幕末期、福井藩主の側近として活躍した橋本左内は、十五、六歳のころに著した『啓発録』の中で、立派な武士（大人）となつていくために、第一に「稚心を去る」ことが大切であると述べています。「稚心」とは幼稚な心、つまり親の庇護の許で甘える子供心ということです。

左内は、自分のことばかり考える「子供の心」を去り、周りの人に喜びを与えるという心の持ちようが、大人の世界への第一歩であるとして自らの戒めとしたのでした。

家庭や学校、職場の中で、周りの人に喜びを与えることは、私たちの心の持ち

方次第で、いつでも・どこでも・誰でもできます。

前述の田中さんや娘の由香ちゃんのように、次の人のことを考えて行動することや、いつも周囲の人に「ありがとう」という感謝の言葉をかけること。また、幼い子供であつても毎日の家事の一部を分担して手伝うことなど、どれも他に喜びを与える生き方につながります。

ほんの些細なことでも、「自分に何かできることはないか」と考えて、心の眼を周囲に向けてみてはいかがでしょうか。他に喜びを与える生き方は、きつとあなたの人生を豊かにしてくれることでしょう。

啓発録



橋本左内
十五六歳

